太宰治の作品集『愛と美について』の道程

―作品集の変遷と序文を中心に―

小田桐 ジェイク

はじめに

太宰治の第 4 作品集『愛と美について』は，1939 年 5 月に，書き下ろし作品集として竹村書房から出版された。同書は，出版された当初はおおむね好評を得たが，次第に忘れられた作品集となった。

従来の研究では，収録作品である「秋風記」「新樹の言葉」「花燭」「愛と美について」「火の鳥」が中心に読まれ，とくに太宰治という作家の「再生」[1]を論じる傾向が強い。しかし，作品集としての『愛と美について』はほとんど重視されてこなかった。つまり，各作品が一冊の書物に収められていたという事実，あるいは，書物としての作品集それ自体は，分析されないままとなっているのである。そこで，本稿では,『愛と美について』の物質的な側面に注目し，そのような観点から従来の研究では注目されてこなかった太宰治の書物におけるパラテクスト的要素について考察する。

本稿では，同作品集の初版本に加え，太宰の生前に出版された 3 種類の『愛と美について』を確認したうえで，現在に至るまでの各版に収録されている序文「読者に」の意味を検討する。詳細な機能については後述するが，作品群の前に序文が置かれることで，読者に，作品集の成立事情に関する情報が提供されたり，作家像が提示されたりする。序文を有する作品集においては，そのような序文が，収録されている作品群に直接つながっていくのである。とくに本作品集のように，序文が著者自身によって書かれている場合だと，作家のイメージが自身によってつくりだされ，収録されている作品や作品集それ自体の解釈にも影響を及ぼすことがある[2]。太宰はしばしば，自作に言及したり自作を引用したりすることで，セルフ・プロデュースを行っているが[3]，本稿では，作品集『愛と美について』

---

[1] 代表的な先行研究としては，野口尚志「太宰治「秋風記」論―空虚な「私」はどこへ帰ったか」（『太宰治スタディーズ』2010 年 6 月），高塚雅「太宰治「新樹の言葉」を読む―過去の家を焼く兄妹」（『中京国文学』2010 年），永井博「〈自意識〉の時代の終焉と新しい家の創始―太宰治「花燭」論」（『四日市大学論集』1998 年 9 月），矢島道弘「太宰治・文学位相の転換（前）―『火の鳥』まで」（『国文学研究』1977 年 3 月）など参照。

[2] 本稿における序文の機能に関しては，ジェラール・ジュネット（和泉涼一訳）『スイユ』（水声社，2001 年）におけるパラテクストの概念を参照している。

[3] 拙稿「無題序文における自己宣伝の機能―太宰治の作品集『思ひ出』を中心に」（『阪大近代文学研

における序文「読者に」の機能を分析の対象にする。

本稿では，まず初版本と同時代評価を分析し，書物の特徴を明らかにする。こうした特徴を踏まえたうえで，戦後に出版された 3 冊の『愛と美について』とその後に出版された個人全集がどのように変遷していったのかを分析する。その際にとくに注目するのは，作品集と序文の関係の瓦解である。また，太宰没後に出版される新潮文庫版『新樹の言葉』という作品集とその中に収録されている奥野健男「解説」の内容を分析し，『愛と美について』という作品集や初版本にあった序文がどのように扱われているか，またそのイメージの変遷を明らかにする。

初版本の匣

1　作品集『愛と美について』初版本の特徴

『愛と美について』の初版本の特徴として，装幀デザインをまず確認したい。本書は白を基調とした匣入りの書物である。匣の装幀デザインは上中央が書名，下中央が著者名，中央部は赤と緑色の花の絵で飾られている。背表紙には書名と著者名と出版社が印刷されている。また，初版本には帯もあったはずであるが，入手困難なため本稿では分析の対象外とする[4]。初版本の装幀デザインについて，津島美知子が「太宰は大層意気込んで，外国の刺繍の本から図案を採つて自ら装釘した」[5]と述べているが，実際に太宰がどの程度装幀デザインに関係したのかは不明である。ただし，1939 年 3 月 28 日付の手紙で，太宰が竹村書房関係者である竹村坦に装幀デザインの提案として本を送ったことが分かり，太宰が装幀デザインに関心を持っていたことを確認できる[6]。

太宰は装幀デザインにさほど関わらなかったかもしれないが，出来上がった作品集『愛と美について』に関して，竹村坦宛ての 1939 年 5 月 18 日付の手紙で次のように述べている。

本が，たいへん綺麗にできて，つつしんでお礼申し上げます。私も交際下手，不器用，

究』第 19 号，2020 年 3 月刊行予定）ではこのセルフ・プロデュースという現象について詳細に論じている。

[4] 日本近代文学館刊行複刻版『愛と美について』（1992 年）には帯がなく，「太宰治文学館　解説書」（1992 年）には帯は「入手に至らなかった」とある。一方，山内祥史「『愛と美について』の書誌（二）」（『日本文芸研究』1970 年 4 月）には翻刻が収められており，川島幸希「復刻本の外装の東西横綱」（『日本古書通信』2016 年 1 月）でも帯の存在が述べられている。他に山梨県立文学館の特設展「太宰治 生誕 110 年―作家をめぐる物語」の冊子「対談 太宰治・著書と資料をめぐって」（2019 年 6 月 15 日）の中に画像があるが，さらなる研究が必要である。

[5] 津島美知子「後記」，近代文庫 85『太宰治全集』第 4 巻「愛と美について」（創芸社，1953 年 7 月）。

[6] 筑摩書房版『太宰治全集』第 12 巻（1999 年）に収載されている昭和 14 年 3 月 28 日付の竹村坦宛の書簡（189–190 頁）を参照。

> 口下手で，いろいろ失礼なわがまま申したと思ひますが，すべて御海容下され，今日，この本を撫でながら，さぞや御心労，御厚志のほど，しみじみわかつてまゐります。定価二円以上でなくつても，なんでも，私は，ちつとも，かまひません。二円以上ほどの，綺麗な本ができれば，私は，それだけを願望してゐたのです（以下略）[7]。

太宰は書物の出来上がりについて感動の言葉を残しているにもかかわらず，同時代評価では書物の装幀デザイン等に一切触れていないことが対照的である。つまり，作家自身は出来上がった書物に満足しているのに，評言の中では装幀デザインより他の要素が取り上げられている。その際に注目された要素の一つは，作家自身による序文である。

次に引くのは，『愛と美について』の序文「読者に」の一節である。

> 全部，未発表の作品であるから，読者も，その点は，たのしみにして読めるのではないかと思ふ。
>
> こんな物語を書いて，日常の荒涼を彩色してゐるのであるが，けれども，侘しさといふものは，幸福感の一種なのかも知れない。私は，いまは，そんなに不仕合せではない。みんなが堪へて，私をゆるしてくれてゐる。思ふと，それは，ずゐぶん苦になることばかり，多いのであるが。
>
> 「火の鳥」は，書きかけて，一時ていとんの形である。なかなか，むづかしいのである。これに就いては，もうすこし考へさせてもらひたい。

この内容を 3 つに分けると，作品集の成立情報，収録作品の解釈の提案，作家像の提供である。作品集の成立情報は最初の文章にあり，『愛と美について』は書き下ろしであることが強調されている。収録作品の解釈の提案が序文の中央を占めており，作家像と混在しているところもある。作品群は「日常の荒涼を彩色してゐるが，けれど侘しさといふのは，幸福感の一種」であるというように提示されている。また，「私は，いまは，そんなに不仕合せではない」とあり，ここから想像される作家像が作品像とともに提示され，作品の内容とあわせて読むことを促している。そして，「みんなが堪へて，私をゆるしてくれてゐる」とあるが，この意味は 1940 年 6 月に出版された人文書院版『思ひ出』収載の「新樹の言葉」に与えられた無題序文の内容で確認できる。その無題序文では『愛と美について』が書き下ろし作品集であり，「前例の少い事と思ふ。私のわがままを許容して，そのやうな冒険を敢へてしてくれた竹村書房主に，あらためて礼を言ひたい」ということが書かれている。

実際に『愛と美について』の序文はどのように読まれたのか，その影響がどれほどあっ

[7] 『太宰治全集』第 12 巻，筑摩書房（1999 年）193 頁。

たのかを同時代評価で確認していこう。早くに出た評価の中で，大谷好雄「太宰治著「愛と美について」」(『作品倶楽部』1939 年 7 月）には次のようにある。

> 太宰さんは，前書の「読者に」で
> 「こんな物語を書いて，日常の荒涼を彩色してゐるのであるが，けれども侘しさといふものは，幸福感の一種なのかもしれない。云々」
> と言つて居られるが，読む者の心へも同じ様なゆとりを目覚して呉れる。「終の栖」といふ言葉がある，そんな思ひだ。

この評言では，序文「読者に」のなかに読者の反応が見出されている。さらに「「秋風記」の私や，「新樹の言葉」の私や「花燭」の男爵。恐らく，この三人は太宰さんの一部分どころではない。何時かの時の全部であらう」と作家像が収録作品にあわせて読まれている。大谷評の結びではふたたび序文の一部が取り上げられ，「誰も一回は「侘しさの幸福感」を味ふだらう。そして一回読んだ人は，時々ふと空の青さを見上る様に此の本のページをくるだらう」とあり，『愛と美について』それ自体と序文の内容をあわせて評価している。

次に，浅見淵「太宰治」(『現代作家卅人論』竹村書房，1940 年 10 月）では，とくに「秋風記」と「新樹の言葉」が高く評価されるが，序文については次のように述べられている。

> ところで，作者はこの短篇集のはじめに，いま割に幸福な平和な生活を営んでゐる旨を書きつけてゐる。僕はたまたまそれを読んで感じたのだが，太宰治の文学の運命的な不幸は，現実生活が無事安穏になるとその切実感が薄れていくことではないか。

序文と作品とが太宰の「現実生活」とあわせて読まれており，「作品の密度がどこか粗くなり，迫つてくるものが希薄になつてゐるやうに思はれるのだ」と続く。序文の中の作家の言葉が浅見の「太宰治の文学」を考え直させていることが読み取れる。浅見評の言葉からも，大谷評と同じように『愛と美について』の序文「読者に」は作家像と作品像とを結びつける機能を果たしていることが確認できる。

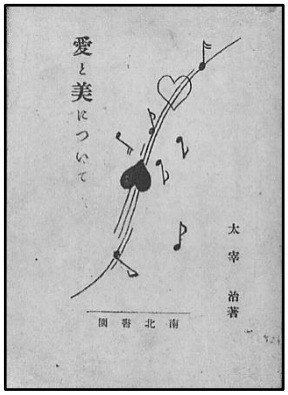
さらに，田辺茂一「凡俗の美―太宰治の印象」(『轗軻』昭森社，1941 年 6 月）と板垣直子「太宰治論」(『新潮』1941 年 10 月）という評の中でも『愛と美について』が言及される。田辺評では「新樹の言葉」が注目され，「これを僕は一番に推したい」と言い，作中人物と作家については「幸吉といふ健康な青年があらはれ」，「健康が正面きつてあらはれるのは，彼の作品ではじめてである」と評価する。また，板垣評では同じく「新樹の言葉」が取り上げられ，「深い感情をもつて追想することのできるものが，そのまま作品になつた時に，割合すぐれたはつきりした形をとる」と評価する。いずれも作品に高評を与えているが，序文「読者に」は取り上げられない。

大谷評と浅見評が示唆しているのは，初版本『愛と美について』を手にした人は序文「読者に」を作品集に収められた作品と重ねて読んでいたということである。また，作品だけではなく，作家像も語られており，作品の内容と併読されていた。序文の機能を考慮すると，『愛と美について』の「読者に」にはプライミング効果が現れている。つまり，序文を読んだ人は，その中身に影響され，収録作品の内容を期待する[8]。大谷評と浅見評で確認したように，作家のイメージと作品の内容は併読される。しかし，『愛と美について』の序文「読者に」は必ずしもこの作品集とともに提示されていたわけではない。

第一和光版の表紙

2　戦後の 3 冊と太宰没後すぐの『愛と美について』

初版本を経て，最初に出版されたのは 1945 年 11 月の南北書園版『愛と美について』である。この出版社については情報が少ないが，確認できる範囲では 1941 年から 1948 年まで，主に文芸書を出版し，太宰治の作品集『愛と美について』と『八十八夜』[9]を出版している。南北版『愛と美について』は装幀デザインが初版本と大きく異なる。表表紙では音符とハートが四本の線と共に中央にデザインされ，他には書名と著者名と出版社名がある。収載内容は『愛と美について』の各作品であり，版面（文字と行間，ページ番号など）は初版本と同じである。一方，この作品集には序文「読者に」が収載されていない。ちなみに南北版に関して，太宰が竹村坦に宛てた手紙に「「愛と美について」の件，それではよろしくお願ひ致します。あの中の作品は，他の選集にいれないやうに気をつけませう。ウンと刷つて下さい」[10]という一文がある。しかし，実際に竹村が南北書園とどのような関係であったかは不明である。



南北書園版の表紙

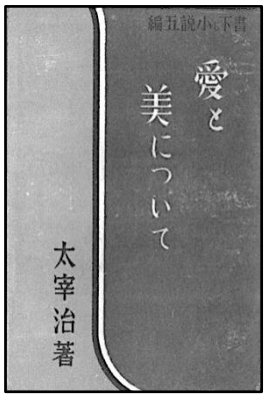
次に出版されたのは，1947 年 7 月の和光商事合資会社版（以降，和光版と称す）『愛と美について』である。また装幀デザインが変わり，中央に本を持つ女性の絵があり[11]，上部に「小説集　愛と美について」，下部に著者名がある。収載に関しては，序文を除けば，版面も初版本と同じである。また，本扉に初版本の表表紙と似たような花の絵がある。

---

[8] このプライミング効果については，ペラット（Valerie Pellatt）編著 *Text, Extratext, Metatext and Paratext in Translation*　（Cambridge Scholars Publishing, 2013）の「序文」参照。
[9] それぞれの出版は 1946 年 3 月，1947 年 2 月，1948 年 8 月である。
[10] 竹村坦宛，1945 年 11 月（日付不明，『太宰治全集』第 12 巻，筑摩書房，1999 年，336 頁）。
[11] この絵に「青児」という文字が見られるので，東郷青児の作品ではないかと考えられる。

最後に出版されたのは，1948 年 6 月の，第 2 和光版『愛と美について』である。赤と灰色から成る表表紙に変わり，書名と著者名以外に，「書下し小説五編」と上部にある。中身に関しては，第 1 和光版と同じように本扉に初版本を連想させる花の絵があり，序文はなく，初版の版面と同じかたちで作品群が収録されている。奥付の発行日は昭和 23（1948）年 6 月 30 日とあり，この少し前に太宰は亡くなっている。ちなみに，この第 2 和光版は目録や年譜に登録されたり，されなかったりする書物である[12]。両方の和光版については関係する書簡等の資料がないので，成立や出版などの事情は明確ではないが，太宰治の書簡等を確認するとおよそ半年から 1 年にわたるやり取りの後に書物が出版されるのが普通である。そのような流れを考慮すると，第 2 和光版は生前の書物として扱うのが適切であると考えられる。

この 3 冊の主な変化は装幀デザインにあるが，いずれの版においても序文「読者に」が省略されていることも注目すべき点である。序文のない 3 冊がどのように読まれたのかは気になるが，確認できる範囲では書評等はない。とはいえ，初版本に対する評価では序文が明らかに意識されており，その内容が読み方に影響を与えていたことはすでに確認した。ただし，先ほど取り上げた田辺評と板垣評においては序文には触れられていないので，重視されない場合もあることには留意しておかなければならない。一方で，大谷評と浅見評ではプライミング効果が確認できるので，序文がない『愛と美について』では読み方に変化が生じるはずである。



第二和光版の表紙

序文が省略されると，読者が本作品集所収の作品群を読む前に目にするのは，書名や著者名，装幀デザインといったパラテクスト的要素のみとなる。戦後の 3 冊が出版された当初，太宰治は今日ほど見慣れた著者名ではなかったはずであるし，『愛と美について』という書名は文芸作品集ではなく随筆集と受け取られることもあっただろう。そういったことを指摘したうえで，ここではそれぞれの表紙デザインの変化とその効果について考えてみたい。

南北書園版の表紙には音符とハートがデザインされているので，音楽のモチーフが強く表現されているといえる。しかし，収録されている 5 作のどれにも音楽に関係する要素は含まれていない。この版を手にする読者がそういうテーマの作品が中に収録されていると期待しても不思議ではない。第 1 和光版の表紙デザインには本を持つ，緑色のドレスの女性が描かれているが，このデザインは読む前というよりは読後の印象に影響を与えることがある。なぜなら，各作品の主要な人物には女性が多く，とく

[12] たとえば，山内祥史『人物書誌体系 7 太宰治』（日外アソシエーツ，1983 年）と同『太宰治の年譜』（大修館書店，2012 年）にはない。ただし，山内祥史編『太宰治著術総覧』（東京堂出版，1997 年）などでは言及されているので，この点では揺らぎがあることがうかがえる。

に表題作「愛と美について」の最後に登場してくる「母」が表現されていると読者には思われたであろう。第 2 和光版は表紙デザインそれ自体はさほど印象を与えるものではないが，右上にある言葉「書下し小説五編」が際立つ。なぜなら，「書下し小説五編」は初版本にある序文の冒頭部の「全部，未発表の作品である」と直接結びつくからである。

ところで，戦後の 3 冊からはなぜ序文「読者に」が省略されたのだろうか。先行研究では，安藤宏が，作家の実人生の「テーマ」と合わなかったし，「戦後においてもまた，郷愁世界に封印されたことになったの」で省略されたとしている[13]。しかし，戦後に出版された『玩具』（あづみ文庫，1946 年 8 月）や『猿面冠者』（鎌倉文庫，1947 年 1 月），『姥捨』（ポリゴン書房，1947 年 6 月）にも序跋文は見られ，収録作品に関する思い出話や作家のイメージにつながる言説が含まれている。とくに『猿面冠者』の「あとがき」の，「この選集一つお読みになれば，太宰といふのはこの十年間，一体どんな事に苦しみ努めてきた作家か，たいておわかりになれるやうに工夫して編輯した」という言葉が作家像を描写している。このような，作家像をつくろうとする言説は，『愛と美について』の序文の「日常の荒涼」云々や「ずゐぶん苦になることばかり，多いのであるが」云々という作家イメージにもつながる。全体として，これらの序跋文は，作家自身の言葉から成り，同じような作家像をつくりだそうとしていることが読み取れる。

序文「読者に」が誰のどのような意図で省略されたかはともかく[14]，作品集の性格にどのように影響するのかが問題である。すなわち，大谷評、浅見評の場合とは逆に，戦後の『愛と美について』を手にする読者は，序文を欠いているため，作品ないし作家のイメージがすぐには浮かんでこない。とくに作品については，「こんな物語を書いて，日常の荒涼を彩色してゐる」という，読者に特定の読み方を促す言葉が省略されることになる。そのほか，作品集全体について言えば，序文の最後に「昭和十四年五月」とあるので，これが省略されると，はじめて作品集を手にした人は新しく出版されたものだと思い込むこともあるだろう。戦後の 3 冊の奥付を確認してみると，いずれも初版本ないし以前の版の出版情報が載っていないからである。

序文「読者に」は戦後に出版された 3 冊に収録されていないだけではなく，太宰の個人全集にもしばらく収録されていない。最初の個人全集は 1948 年から 1949 年にかけて，八雲書店が出版した『太宰治全集』である。太宰の生前から計画され，まず第 2 巻「虚構の彷徨」が出版され，没後に第 1 巻「晩年」等が出版された。太宰の提案によると，『愛と美について』の各作品が第 4 巻「秋風記」に収録されるはずであった。しかし，出版社の事情によると思われるが，結果として作品群が第 3 巻「二十世紀旗手」と第 4 巻「おしやれ童子」とに分けられ，作品集としてのかたちが瓦解してしまった。また，この全集の各巻

[13] 安藤宏「太宰治『愛と美について』論」（『東京大学国文学論集』2008 年 5 月）
[14] 「読者に」を省略したのが作家だったのか出版社だったのか確認できないので，安藤の指摘するすでに紹介した理由は納得し難い。

には豊島与志雄による「解説」が収められているものの,『愛と美について』への言及はない。

次は創芸社から 1952 年 7 月に発行された「近代文庫」85『太宰治全集』第 4 巻「愛と美について」である。書名からすれば，作品集『愛と美について』が中心のように見えるが，作品集に言及するのは津島美知子「後記」だけである。目次では作品集『愛と美について』のために紙面を割くことはなく，序文も収載されていない。「後記」に『愛と美について』の成立に関する簡潔な説明だけがある。序文「読者に」は，1951 年 7 月に刊行された第 16 巻「もの思ふ葦」という随筆集に収録されているので，随筆として扱われていることがわかる。2018 年に出版された柏艪舎版『心の王者　太宰治随想集』にも，序文「読者に」が随筆とともに収録されており，このような随筆としての扱いが今なお見られる。注目すべき点は，この柏艪舎版においては他の序跋文はいずれも本文と一緒に収められているのに，「読者に」は本文から切り離されて随筆のなかに収められている点である。丸括弧内に「一九三九年　『愛と美について』巻頭」と記されているので，序跋文扱いにはなっていないことが確認できる。

筑摩書房版の全集では，序文「読者に」は再び作品集『愛と美について』の一部として示されることになる。その時まで，作品集『愛と美について』の序文が作品群とともに提示されたのは初版本のみであり，一つのセットとして扱われることはなかったのである。

3　筑摩書房版『太宰治全集』と作品集の序文

本節では，作品集『愛と美について』及びそこに収められた作品群の姿を，筑摩書房版『太宰治全集』に即して書誌学的に分析していく。筑摩書房版の『太宰治全集』は，今日までに 11 回にわって刊行されている。第 1 次は 1955～1956 年，第 2 次は 1957～1958 年，第 3 次は 1959～1960 年，第 4 次は 1962～1963 年，第 5 次は 1967～1968 年，第 6 次は 1971～1972 年，第 7 次は 1975～1976 年，第 8 次は 1988～1989 年，第 9 次は同じく 1988～1989 年，第 10 次は 1989～1992，第 11 次は 1998～1999 年である[15]。本節では 11 回にわたって刊行された筑摩書房版『太宰治全集』における『愛と美について』の姿を確認し，特にどのような形で序文「読者に」が提示されていたのかを明らかにする。この個人全集において「読者に」は常に作品集それ自体と共に提示されていないという特徴があり，その意味を論考していく。

筑摩書房版『太宰治全集』に『愛と美について』が収められたのは，1955 年 11 月刊行の第 4 巻においてであった。箱付きで，表側に収録作品名が印刷されている。目次と版面のデザインから『愛と美について』は他の作品とは別の存在であることが示唆されている。

[15] 太宰の個人全集の成立と出版について，さらに詳しくは滝口明祥『太宰治ブームの系譜』（ひつじ書房，2016 年）参照。

目次には作品集『愛と美について』が「葉桜と魔笛」の後にあり，他の作品よりも『愛と美について』の字が大きくなっている。実際に書物に入ると，同じく「葉桜と魔笛」の後に中扉があり,再び作品集名が大きく記されており,作品集のための場が設けられている。しかし，この版では,「読者に」は作品集とともには提示されておらず,「後記」に全文が収められている。その前後に作品集『愛と美について』に関する文章が少し書かれているが，序文「読者に」の内容を解説する言説はとくにない。

1957 年 11 月に第 2 巻があらためて出版され，版面のデザインは前の版と同じようなかたちで，作品集『愛と美について』のための場が明確に設けられている。しかも，この第 2 巻はジャケット付で，そこにあらためて収録作品名が印刷されている。ジャケットの目次でも作品集『愛と美について』の作品群の前に，太字で「愛と美について」と記されている。ただ，この版でも，序文「読者に」は，とくに説明もなく,「後記」の一部になっている。

次に『愛と美について』の作品群が収録されるのは，1960 年 2 月刊行『太宰治全集』第 3 巻であるが，この版は今までとは大きく変わり，作品集『愛と美について』のための場は設けられず，各作品は他の作品とともに収録されている。序文「読者に」は亀井勝一郎「解説」の中に収められているが，全文ではなく，一部引用にとどまっている。その次に出版された 1962 年 4 月刊行の『太宰治全集』第 2 巻になると，あらためて『愛と美について』のための場が書物中に設けられるが，序文「読者に」は本文にも「解説」にもない。次に出版された 1967 年 5 月刊行の『太宰治全集』第 2 巻でも同じく序文は見当たらない。一方で，1971 年 4 月刊行の『太宰治全集』第 2 巻の「後記」には序文「読者に」の全部が掲載されている。

ここまでの筑摩書房版『太宰治全集』に収録された『愛と美について』の情報を整理すると，1955 年から 1971 年にかけて，6 回にわたって出版され，序文「読者に」が「後記」に収録されたのが 3 回，収録されていないのが 2 回，一部が「解説」に引用されているのが 1 回，ということになる。序文「読者に」が作品集そのものとともに提示されないことで，戦後の 3 冊と同じように，与えられるメッセージが異なってくる。つまり，最初に出版された筑摩書房版『太宰治全集』では『愛と美について』が作品集であることが示唆されているが,「後記」に序文が収載されていることからすると，序文は作品集の一部としては意識されておらず，補足資料であるかのように扱われていたことがわかる。

1975 年 9 月に出版された筑摩書房版『太宰治全集』第 2 巻では，以前の版と同じように『愛と美について』のための場が設けられているが，それだけでなく，作品集の初版本以来はじめて,序文「読者に」が作品群の前に置かれている。版面は以前の版と似ているし，作品集であることが中扉に示されている点も同様であるが，中扉の裏側に序文「読者に」が載せられ，次のページから「秋風記」という作品が始まる。初版本から 36 年後のこの版

で,『愛と美について』が一つのセットとして提示された。こうした変化は，研究の成果[16]や当時の全集出版ブーム[17]による影響の結果ではないかと考えられる。ここで注目しておきたいのは，この版では『愛と美について』の初版本の形が再現されて，序文と 5 作品が一つのセットとして提示されていることである。

この版の刊行を経て，1978 年 7 月，1988 年 9 月，1989 年 8 月，1999 年 6 月に筑摩書房から『太宰治全集』が出版された。このなかでは，1989 年版の第 2 巻だけが異なった形式になっており，収録作品全てが推定執筆年月順に配列されているが[18]，この例外を除いて，1975 年以降，筑摩書房刊行『太宰治全集』に収録されている『愛と美について』は，序文「読者に」を有する作品集のかたちで提示されてきている。

一方で，作品集『愛と美について』の単独出版については全集とは異なった状態である。第 2 和光版以降，『愛と美について』が単独出版されたのは，1992 年の日本近代文学館による複刻版である。この複刻版の重要なところは，非常に入手し難い初版本が再現されており，初版本が出版された当初とほぼ同じ状態で触れられることである。ただ，この複刻版に先立って，1966 年 2 月に大和書房から出版された，もう一つの作品集『愛と美について』がある。書名は『愛と美について』であるが，中身を確認すると，もとの作品集『愛と美について』とは異なった作品集であることが分かる。「火の鳥」は収録されておらず，「秋風記」「新樹の言葉」「花燭」「愛と美について」以外に 11 作品が収録されている。巻末に大岡信「解説」が収載されているが，もとの作品集『愛と美について』や序文「読者に」には言及されていない。

他にも多くの作品集に『愛と美について』の各作品が収録されているが，これらの書物は『愛と美について』の単独出版ではない。『愛と美について』の単独作品集として見ることができるのは太宰の生前に出版された 4 冊と複刻版の 1 冊であるが，その 5 冊の中で，序文「読者に」が作品集と共に一つのセットとなっているのは初版本と複刻版だけであり，似たような形として提示されるのはこれまで確認してきた個人全集の一部だけである。

4　文庫本と作品集『愛と美について』―新潮文庫の「解説」を中心に

序文「読者に」は個人全集や複刻版で作品集の一部として再現されてきたが，もう一つの作品集である新潮文庫版『新樹の言葉』における『愛と美について』の作品群を取り上げ，序文と「解説」の役割を考察してゆく。

---

[16] 山内祥史「「愛と美について」の書誌（一）」(『日本文芸研究』1969 年）が『愛と美について』の成立と出版に注目したことが，この作品集を全集に収める際の収め方に影響を与えたのではないかと考えられる。

[17] 田坂憲二著『日本文学全集の時代―戦後出版文化史を読む』（慶應義塾大学出版会，2018 年）や前掲の滝口明祥の著書等参照。

[18] この全集の分析としては，安藤宏「個人全集と作家研究 新版『太宰治全集』の刊行に思うこと」（『ソフィア』1992 年 4 月）参照。

新潮文庫版『新樹の言葉』は，1982 年 7 月にはじめて出版され，2008 年 12 月に改装版が刊行された。この間，収録作品や解説などは変わらず，最も大きな変化は装幀デザインである。しかし，表紙デザインは両版とも似たような木のモチーフの絵である。改装版のほうがより鮮やかな色遣いになったことは，その当時の他の新潮文庫版の太宰治シリーズと同様に唐仁原教久が担当したためであろう。

収録されているのは，「I can speak／懶惰の歌留多／葉桜と魔笛／秋風記／新樹の言葉／花燭／愛と美について／火の鳥／八十八夜／美少女／春の盗賊／俗天使／兄たち／老ハイデルベルヒ／誰も知らぬ」という 15 作品である。目次は，『愛と美について』が作品集として提示されておらず，各作品が発表された順番で配列されている。この書物では，一つの作品が終わり，ページをめくると次の作品の中扉があり，その次のページから本文が始まるという流れになっている。

本作品集の注目すべき特徴は，収載されている奥野健男「解説」である。個人全集，たとえば 1988 年刊行のちくま文庫版には「解題」があり，『愛と美について』の書誌や成立に関する情報があるが，読み方の提案はない。それに対し，本作品集の「解説」では，各作品の読み方が提案されていることが確認できる。「解説」の末尾に「(昭和五十七年六月，文芸評論家)」という，文章の執筆年と奥野健男の身分が記されている。初版本から「解説」の中身は更新されておらず，当時の読み方が長く残されていることがうかがえる。

この解説の内容は 35 年以上経ているが，斎藤美奈子が指摘するように，文庫本「解説」の解釈は読者の「メディアリテラシー」を磨き上げるものである[19]。その解説が書かれた当時の読み方を確認することができる貴重な言説であるとも言えよう。とくに「解説」にある言葉がどのようなかたちで作品像ないし作家像を形成しているのか，また収録作品の読解をどのように提案するのかということを考慮する必要がある。初版本『愛と美について』の序文「読者に」の効果はすでに確認したが，文庫本の「解説」が序文の代わりに特定の読み方するよう促している点は重要である。

この「解説」で奥野健男は太宰治の全作品が便宜上，「前期」「中期」「後期」に分けられるという。文庫版『新樹の言葉』所収の作品群は「中期」に位置づけられるとされ[20]，この「中期」という時期は太宰自身の「再生」や「更生」[21]，「人生の再建」[22]で始まるもので，いわば「明るい」作品を書こうとする時期として位置づけられる。

こうした内容を踏まえ，奥野の「解説」を考察してみたい。奥野は収録作品全体の時期と作家について，「周知のように太宰治の前期の作品は，左翼運動とそこからの離脱，麻薬

[19] 斎藤美奈子『文庫解説ワンダーランド』(岩波新書，2017 年)。
[20] この「中期」とは 1938 年半ばからで，たとえば山内祥史『太宰治の年譜』(大修館書店，2012 年)では，「「原稿生活者」としての自覚が生まれ，本気に文筆生活を志願，意識的な転機が訪れて，いわゆる「中期」への意向が漸次動き始める」時期と位置づけられている。
[21] 野口尚志「太宰治「秋風記」論—空虚な「私」はどこへ帰ったか」(『太宰治スタディーズ』2012 年 6 月)。
[22] 安藤宏前掲論文（2008 年）参照。

中毒と三度の自殺未遂，心中相手の女性の死などの罪意識の中に書かれた，しかしこれだけは書き遺さねばという使命感にかられた白鳥の歌であった」と述べている。現在もなお比較的よく提示される太宰の作家像を奥野はここで描写していることが確認できる。

「解説」の中で奥野は，収録作品群と作家像だけではなく，作品集『愛と美について』について，次のように紹介している。

> 『秋風記』以後の五篇は，いずれも昭和十四年五月，竹村書房から刊行された書下し創作集『愛と美について』に発表された作品である。当時，太宰治は書下し長篇『火の鳥』の刊行をめざし甲州などに引きこもり努力をしていたが，ついに『火の鳥』は完結できず，かわりに未完の『火の鳥』を含めた五篇の書下し作品をまとめた『愛と美について』を竹村書房から刊行したのである。この集において書下し創作集，『愛と美について』の全篇を収録する機会を得た。

ここで奥野は『愛と美について』の初版本に触れているものの，その作品集の書き下ろしとしての本質やその意味はとくに取り上げていない。むしろ，成立情報ないし伝記情報に近い説明になっている。これ以上，元の形の『愛と美について』は取り上げていない。作品集の紹介の次に，序文「読者に」の全文が載せられているが，その内容について奥野は一言も解説していない。その代わりに，『愛と美について』の作品群について別の情報を提供している。

最も長い解説は「火の鳥」に与えられている。「火の鳥」が「未完」で終ってしまった理由について，太宰治が以前の自殺未遂に罪悪感を抱え，そのことによる挫折が原因で作品が途中で終ってしまったという仮説が提供されている。また，他の作品については，奥野はそれぞれをおおむね高く評価している。たとえば，「秋風記」は「切なくかなしくも美しい作品で，太宰文学の中でも特別な位置をしめている」と述べ，「新樹の言葉」の「表現はまことに卓抜で，文章の魔術師の名にはじない」という評価をしている。「花燭」の内容をドストエフスキーの作品と比較し，「大甘な結末だが，ほのぼのとしたたのしさが漂っている」としている。「愛と美について」については後に発表される「ろまん燈籠」[23]を続編として位置づけ，作品の形式の独自性や登場する人物が「太宰の夢見た家族だろうか」と述べる。このような内容は，もともとの序文「読者に」にある「日常の荒涼を彩色してゐる」作品像とは違った，より明るい作品像を提案している。むしろ先ほど取り上げた「左翼運動とそこからの離脱，麻薬中毒と三度の自殺未遂」を乗り越えようとする作家像と合致するのである。

なぜこの作品集の代表作が「新樹の言葉」であるのかは不明であるが[24]，本作品集のジャ

[23] 『婦人画報』1940 年 12 月～1941 年 6 月。
[24] この時期に国語教科書に「新樹の言葉」が収録されていることが関係しているのではないかと思わ

ケット裏側にある言葉が表題作となった理由を示唆している。たとえば,「麻薬中毒と自殺未遂の地獄の日々」と太宰治の作家像に関する言葉がある一方,「心温まる空想譚のなかに再生への祈りをこめた『新樹の言葉』」という文章もある。しばしば取り上げられる自殺等を中心とした「太宰」像が提示されると同時に,「心温まる」作品も収録されているとされ,「再生」や「作者の新生」という奥野健男の言葉に合致するように，標題作が「新樹の言葉」に決まったのではないか。

このように，新潮文庫版『新樹の言葉』の中に収載されている「解説」の中身と外装にある言説は，これまでにつくられた「麻薬中毒と自殺未遂」という太宰像の裏に,「心温まる」部分もあることを提示している。これは提示にとどまらず，作品の読み方の提案ともなっている。『愛と美について』の初版本は序文「読者に」を有していたのに対し，新潮文庫版『新樹の言葉』はその代わりに奥野健男「解説」が作品群の読み方を提案するかたちとなっている点を特徴とする。

『愛と美について』の作品群の扱われ方を検討すると，ほかの文庫本では，たとえば 1970 年から刊行されている角川文庫版『ろまん燈籠』の「解説」は，相馬正一「太宰治の人と文学―その修業時代―」と小山清「作品解説」というように二つの部分に分けられている。しかし，いずれも『愛と美について』の各作品については詳しく解説していない。小山は短く成立情報をあげ，作品集『愛と美について』を「劇作集」としたうえで，序文「読者に」の一部を取り上げるが，その内容に関する解説はない。あるいは，1973 年に刊行された旺文社文庫版『走れメロス・新樹の言葉　他九編』には桶谷秀明「解説」があり，この解説も「太宰治の生涯の「転機」について」と「作品解説」というように二つの部分に分けられている。成立情報は多少含まれているが，書誌情報はなく，序文「読者に」への言及もない。これらの文庫本は『愛と美について』の各作品と深い関係があると言えるものの，ここまで見てきたように新潮文庫版『新樹の言葉』は奥野の言葉によって読者を特定の方向性の読解へと誘導し,「明るい」イメージを提供している点を特徴とする。

おわりに

本稿は太宰治の第 4 作品集『愛と美について』初版本から近年に至るまでの書物としての姿の変化とその道程を見てきた。とくにそれぞれの書物が序文「読者に」をどのように扱ってきたかを取り上げた。初版本から 36 年後の筑摩書房版『太宰治全集』において，初版本と同じようなかたちを再現しようとする姿勢が見られたが，その筑摩書房版『太宰治全集』においても長い間，序文「読者に」は作品群から切り離されていた。

序跋文は収録作品の読み方に影響を与える機能があり,『愛と美について』の場合だと同

れるが，さらなる検討が必要である。

時代評価の言説で確認できるように，作家自身による文章によって作品像ないし作家像がその中に描かれている。しかし，戦後の 3 冊からはその序文が省略され，書物が与えるイメージが変わることになる。戦後の 3 冊についての評価は確認できる範囲では存在しなかったが，書物それ自体が与えるイメージが変わることは明らかである。とくに，この戦後の 3 冊には序文がなく，本文に影響を与える可能性を持つ作家イメージが提示されていない。さらに，太宰没後，作品集『愛と美について』は序文と 5 作品が一つのセットとして提示されることがしばらくなくなり，今なお手にしやすい文庫本もそのようなかたちになっている。むしろ，新潮文庫版『新樹の言葉』においては，奥野健男「解説」が，序文「読者に」の全文を載せているものの,『愛と美について』の各作品を序文とは別の角度から提示しようとしていた。

本稿では,『愛と美について』を分析対象として，主に装幀デザインと序文「読者に」の道程を確認することにより，作品集の扱われ方を見てきた。このような考察は，作家像や個別の収録作品の新たな読解の可能性を示すとともに，作品集における序文の働きについてのパラテクスト的研究にも貢献するはずである。

一方，装幀デザインと序文を分析対象とした本稿の考察が,『愛と美について』所収の各作品の読解とどう関係するのかについて具体的に論じることはできなかったので，今後の課題としたい。本稿で若干触れたように，戦後の 3 冊の装幀デザインが大きく変わったことにより，実際にそれらの書物を手にした読者がどのように誘導されたのか，書物それ自体を分析することで，作品の読まれ方を検討していきたい。

Osaka University Knowledge Archive

Title	太宰治の作品集『愛と美について 』の道程 : 作品集の変遷と序文を中心に
Author(s)	小田桐, ジェイク
Citation	越境文化研究イニシアティヴ論集. 4 P.33-P.46
Issue Date	2020-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/85136
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University